

# ペアレントトレーニングを保育現場に応用するための 講座および研修会の実践報告

中 藤 広 美\* ・ 酒 井 志 織\*\*

**要旨** 本報告は、子どもの困った行動への対応について目標を決め、観察・記録し、それを手がかりに望ましい行動を強化したり、環境の構造化や手助けの仕方などを工夫したりして保育することを目的とした講座と研修会の実践報告である。保育者らは子どもが苦手なことを無理強いせず、子どもが楽しみながら取り組める方法を探り、保育者が捉えていた子どもの困った行動には意味があることに気づき、その意味に対応した手助けの工夫を行った。さらに、子どもの特性や発信するメッセージを理解し主体性を尊重しながら事例に取り組んだ。結果、子どもの困った行動が目立たなくなり望ましい行動が増え、保育者のスキルアップが見られた。今後の課題として、望ましい行動に注目する観察・記録方法や全体的な保育の視点に汎用できるようなプログラム検討の必要性が見えてきた。さらに、問題解決はしたものの、実践面での応用力の獲得について検証する必要性が今後の課題としてあげられた。

**キーワード** ペアレントトレーニングの応用 グループワーク 手助けや工夫 環境の構造化  
望ましい行動に注目する

## はじめに

福岡県立大学附属研究所生涯福祉研究センターでは1999（平成11）年より発達が気になる子どもの保護者を対象としたペアレントトレーニングを開講し、2016（平成28）年現在、継続中である。また、学校教育法に「特別支援教育」が位置づけられた2007（平成19）年には、クラスの中にいる発達が気になる子どもの対応に悩む保育者や教育者などを対象とした「特別

支援教育スキルアップ・プログラム」を開講し、今年度で10回目の開講となった。これらの取り組みが地域に広がり、2011（平成23）年度からはA市内の保育・教育・施設などで働く方々を対象とした「ペアレントトレーニングのスキルアップ講座（主催 福岡県A市）」を開講し、今年度で6回目の開講となる。さらにA市主催で園内・校内研修を開催した。このように本学におけるペアレントトレーニングの取り組みは、対象者や開催主体、開催方法などに広がり

\* 福岡県立大学人間社会学部・助教

\*\* 福岡県立大学心理教育相談室・相談員

がみられるようになった。

本稿ではA市が主催した「ペアレントトレーニングのスキルアップ講座」に参加した保育園での2実践と、A市が募集した「ペアレントトレーニングを教育・保育現場に応用するための研修会」に応募した保育園での1実践を報告し、今後の課題を検討する。なお筆者らは、いずれの実践においても講師やスタッフとして関わった。

## I. ペアレントトレーニングのスキルアップ講座について

本講座は、子どもの困った行動への対応について目標を決め、観察・記録し、それを手がかりにして保育や教育をすることを目的としてい

る。募集対象は市内の保育・教育現場および施設などの職員で募集人員は20名（先着順）である。なお、応募条件はできるかぎり5回の講座に全て参加可能な方で、1団体3名までとした。毎回のスケジュールは表1に示したとおりである（開催年によって講義順番が異なる）。講義は福岡県立大学教員とペアレントトレーニングを研究テーマにしている中学教員が行い、グループワークでは福岡県立大学教員が主担当者となった。また、その運営はA市役所職員および福岡県立大学院生・学部生が携わった。なお、講座中に知り得た事例の情報については、参加者全員が守秘義務を負うこと確認した。さらに、事例提案者には、対象児が特定されないよう匿名化した事例を提案するなどの配慮を依頼した。

表1. スケジュール

		18:30	18:40~19:30	15分間	19:45~20:30
1回	1月〇日	事務連絡	・講義：ペアトレの実際と特別支援教育への応用 ・質疑応答	・休憩 ・アイスブレイク	・グループワーク ・困ったことの共有
		18:30~19:20		10分間	19:30~20:30
		講義と質疑応答		休憩	グループワーク
2回	1月〇日	・講義：観察と記録の仕方 ・質疑応答			・目標行動の設定 ・記録の仕方の検討
3回	2月〇日	・講義：環境の整え方と手助けの仕方 ・質疑応答			記録に基づいた検討
4回	2月〇日	・講義：困った行動を減らし、望ましい行動を増やすには ・質疑応答			記録に基づいた検討
5回	3月〇日	・事例発表会 ・質疑応答		*適宜休憩	

## II. ペアレントトレーニングを教育・保育現場に応用するための研修会について

A市主催の本研修会は、園内研修または校内研修として取り組みを希望する園や学校を募

り、講師陣が現場に向かい講義と事例検討を行った。保育園（3園）、幼稚園（1園）、中学校（1校）から応募があり、それぞれの実情に応じてプログラム内容や研修回数、時間、取り上げる事例数を検討し実施した。例として、表

表 2. A園でのスケジュール（園内研修）

		11：30～午睡前	13：30～15：30
1回	○月●日	筆者ら保育参観	・講義：困った行動、望ましい行動、行動の強化について ・事例検討：目標行動の設定・記録の仕方の確認
13：30～15：00			
2回	○月●日		・講義：子どもの行動の観察と記録の仕方およびその効果について ・事例検討：記録に基づいた検討
3回	○月●日		・講義：手助けの仕方、環境の整え方について ・事例検討：記録に基づいた検討
4回	○月●日		・事例検討：記録に基づいた検討
5回	○月●日		・事例検討：記録に基づいた検討

2にA園での園内研修のスケジュールを示す。さらに実施1年後に保育園（1園）より希望が出され再度、研修を実施した。

### Ⅲ. 実践事例

今回の実践報告にあたって対象児の保護者や保育園（園長、保育士）に口頭および文書で説明し、文書での同意を得た。

#### 1. ペアレントトレーニングのスキルアップ講座の実践事例

X年からY年にかけてグループワークで取り上げた事例のうち、2つの実践事例についてセッションを追って報告する。

##### (1) 朝のお集まり中にトラブルにならずに座ってほしい3歳男児

A君は保育園2歳児クラスに在園中の男児である。クラスには20名の子どもが在籍しており3名の保育士で受け持っている。本講座には担任3名が参加した。

##### 【セッション1】

保育士が困っているA君の行動についてグループ内で情報の共有化を図った。その後、次の2週間の取り組み内容を決めた。

##### ① 現在困っていること

A君は、お気に入りの友達と手をつなぎたい時や好きな場所に座れないなど思い通りにならない時に我慢ができない。そして、他児の間へ割り込んだり噛みついたり引っ掻いたりする行動が出やすく、保育士はこのようなトラブル（以下、トラブル）に困っているとのことであった。

##### ② セッション1で決めたこと

困っている行動の観察・記録をしやすい時間帯を決め、「朝のお集りの時間帯、トラブルが発生した場面」とした。観察・記録はABC行動分析の方法<sup>1)</sup>をとり、日付、A君が座る直前の様子（きっかけ）、座っている様子（行動）、A君の行動に対しての周りの反応（結果）、さらにその時に保育士が気づいたことを記入することを決めた。また、A君が座る場所を理解しやすい環境の構造化として、子ども達が座る場所に各自の印であるシールを貼り、その場所に座る時の様子も同じ記録用紙に記入してきてもらうこととなった。

##### 【セッション2】

2週間の記録を基に、トラブルの発生の様子や座る場所を示したシールの効果等について確認し、目標行動を決めた。さらに次の2週間で工夫したり試してみたりすることを決めた。

## ① 記録から見えてきたこと

記録を確認したところ10回の観察記録中、トラブルの発生は2回あった。例えばA君は、はがれ易くなったシールを自分ではがし、座りたい場所にシールを貼って座ろうとした。しかし、すでに、他児が座っていたため、友達を押しよけようとしてトラブルになった。その後、保育士が介入すると落ち着くことができたとのことであった。次に、座る場所を示すシールの効果は、シールを貼ったことでA君が座れた記録は合計5回あった。A君は、座る場所にシールを貼ってあげると喜んで座っていた。一方シールがはがれ、座る場所がわからず他児を押しよけるなどトラブルになったり、気が散ってなかなか座れなかったりする日があった。このような時は保育士が膝に抱くなどの手助けをしてあげると落ち着いて座れていた。つまり、A君はシールで座る場所を示すと座れるが、場合によっては保育士が膝に抱いてあげるなどの手助けが必要であることが見えてきた。

## ② セッション2で決めたこと

目標行動は「朝のお集まり中、トラブルにならずに座る」と設定し、効果的な手助け、環境の構造化、言葉かけなどを探ってきてもらうことになった。さらに、取り組みの効果を確認するため、記録形式の右欄に目標行動の評価欄を追加し評価を記入した。評価基準は◎（自分から最後まで座る）、○（誘われて座る、途中まで座る）、×（トラブルになる）と決めた。次に、A君の座る場所をスモールステップで広げることを確認した。具体的には、子ども達が座る場所に各自のシールを貼る時、A君が喜んで座れるようお気に入りの場所に貼り（他児は場所へのこだわりがない）、できた時に褒めることを確認した。まずは好きなところに座れるように

し、徐々に座る場所を広げられることを目指した。また、A君は座るタイミングを自分で見計らっている様子がうかがえるので、着席を促すときは他児がほぼ座り終えた頃にするなど、保育士の手助けの工夫について確認した。

## 【セッション3】

記録を基に、トラブルの発生、A君にとって効果的だった環境の構造化や手助けなどの効果を確認し次の2週間で取り組むことを決めた。

## ① 記録から見えてきたこと

この2週間、A君は家庭の都合で3日間欠席をしたため記録は6回分であった。目標行動の評価を確認したところ、◎が2回、○が4回、×は0回であった。つまり、朝のお集まりでは一度もトラブルを起こすことがなかった。さらに目標行動に効果がある環境の構造化や手助けなどが見えてきた。効果があった環境の構造化は、「お話じゅうたん」<sup>2)</sup>を絵本の場面でも活用したことである。この時、A君は時間がかかったものの、座る場所にシールを貼らなくてもトラブルにならず座れた。つぎに、保育士がおこなった手助けの工夫は8回あった。例えば、保育士は子ども達がわかりやすい言葉や動作を意識的に使用することや、待つて褒めることを心がけた。さらに、絵本の読み聞かせに誘うときは視覚的情報として実際に絵本を見せるといった手助けの工夫をしたところ、クラス全体が落ちついて活動に参加するようになった。このような雰囲気の中ではA君はトラブルを起こさず落ちついて活動をしていることが見えてきた。

## ② セッション3で決めたこと

A君の褒めるポイントを「座った⇒褒める、待った⇒褒める、最後まで参加した⇒褒める」と具体的に決めた。次に目標行動の評価基準を

前回と変えた。理由はA君がトラブルを起こさなかったにもかかわらず、◎が少なかったからである。セッション2で決めた評価基準では、A君はトラブルにならずに自分から最後まで座っていないと◎がもらえないことになる。目標行動は「トラブルにならずに座る」ことであり、「自分から最後まで座る」ことではない。セッション2で決めた評価基準が高すぎたことを確認し、評価基準を◎（トラブルにならずに座る）、○（なかなか座らないがトラブルにならない）、×（トラブルになる）に変えた。

#### 【セッション4】

記録を基に、トラブルの発生や褒めポイントを探ったことについて確認した。

##### ① 記録から見えてきたこと

記録した回数は9回で◎6回、○2回、×1回であった。観察・記録をした期間は生活発表会前で子どもも保育士も忙しかったにもかかわらず、A君がトラブルを起こしたのは1回だけで、残り8回はトラブルにならずに過ごせた。また、9回の記録中、保育士がA君の行動を褒めた記録は、2箇所あった。ところが、記録を確認すると、A君の褒めポイントは他に6回あったが褒めていなかった。A君の困った行動は目立たなくなりつつあるものの保育士が望ましい行動を強化する意識が定着していないことが見えた。

##### ② セッション4で決めたこと

A君を褒めるポイントは多くあるので、保育士はそれに気づくように意識し、さらにA君が喜ぶような褒め方を探り実際に褒めることが決まった。終わりに次回の事例発表会に向けての発表内容の確認をした。

#### 【セッション5】

この回は事例報告会を実施した。前回、発表

用のフォーマットを渡しており、それにそって保育士から口頭で報告があった。これを受け、スタッフから補足説明と総括をした。

#### まとめ

取組前までは朝のお集り時には毎回のように入園を叩くなどのトラブルを起こしていたA君だが、終了時にはトラブルの回数は2週間で1回だけとなり、この時間帯での困った行動は目立たなくなった。保育士は、A君の座る場所にシールを貼る環境の構造化や、A君が苦手なことを無理にやらせるのではなく楽しみながら取り組めるようなさまざまな工夫を試みた。楽しく自発的に活動するための工夫は、幼い子どもが望ましい行動を獲得する際の大切な視点である。また、褒めポイントを見落としがちだった保育士は、ポイントを見つけ褒めることの必要性に改めて気づいた。このような保育士の工夫や気づきがA君の困った行動を目立たなくするために良い効果を与えたと考えられる実践であった。

#### (2) すれ違う時に手や肩を他児や保育士にぶついたりする行動をやめてほしい2歳男児

B君は保育園1歳児クラスに在園中の男児である。クラスには19名の子どもが在籍しており3名の保育士で受け持っている。本講座には担任2名が参加した。

#### 【セッション1】

担任がB君にやめてほしい行動は、「すれ違う時に手や肩を他児や保育士にぶついたりする行動（以下、ぶつかる行動）」であった。この行動について話し合い、次の1週間で工夫したり試してみたりすることを決めた。

##### ① 「ぶつかる行動」について共有したこと

B君のぶつかる行動は、おもちゃの種類、遊びや活動の内容、さらに前日の睡眠時間などによって発生頻度が異なるとのことであった。特に、自由遊びの時やトイレの前は行動が起きやすいことがわかった。

## ② セッション1で決めたこと

保育士が観察・記録しやすい時間帯をあげてもらい、「おやつ後の遊び時間にぶつかる行動」を観察・記録することとした。この時間帯にした理由は、観察・記録しやすいことに加え、ぶつかる行動が起きやすく、なおかつ保育士が対応しやすい時間帯であるということであった。観察記録は日記形式とし、B君がぶつかる行動をしたときの様子を具体的に観察・記録をしてきてもらうことが決まった。その際、保育士がどのようにかかわったのか、またぶつかる行動をした時の前後の様子に注目して記録をとることを確認した。なお、保育士はB君が他児にぶつかった時のエピソードを具体的に思い出せなかったため、具体的な目標行動の設定は次回に行うこととした。

## 【セッション2】

提出された1週間分の記録を基にB君がぶつかる行動の様子について話し合った。これをうけて次の2週間の取り組み内容を決めた。

### ① 記録からみえてきたこと

この1週間、B君は体調不良で元気がなかったためか、ぶつかる行動が目立たなかったと報告があった。また、保育士はこれまでの保育を振り返り、ぶつかる行動には意味があることに気づいた。その意味とは、不満のサインや遊びに飽きたサイン、その行動自体が遊びでたまたま周囲にぶつかった時であるとのことだった。行動の意味に気づいたことから、ままごと遊びなどB君が飽きやすい遊びでは、保育士が一緒

に遊ぶと「おいしいね」「ありがとう」などと、言葉を交わしながら楽しく遊べることがわかった。また、その行動自体が遊びの時は、広い場所に移動するように声掛けをすると自分から移動し、友達にぶつからず楽しそうに遊べた。このような様子から保育士は安心して遊びを見守れるようになったと報告があった。

### ② セッション2で決めたこと

ABC行動分析の方法で観察・記録をし、記録に保育士の気付きの欄を追加することが決まった。また、観察の時間帯は引き続きおやつ後の遊びの時間帯とした。再度この時間帯とした理由は、①で報告があったように、ぶつかる行動の減少理由が体調不良の影響だけなのか、それ以外の影響はないのかを確認するためである。次に、B君がぶつかる行動の意味を推測し、それに応じた手助けの仕方を工夫することを確認した。具体的には、不満があり衝動的に手が出そうな不満のサインでは保育士が早めの介入をしたり、遊びに飽きたサインの時には新たな遊びを提案したり、さらにその行動自体が遊びである場合は友達にぶつかりにくい広い場所に誘導するなどを決めた。

## 【セッション3】

記録を基におやつ後の遊びの様子について話し合い、これを受けて次の2週間の取り組み内容を決めた。

### ① 記録からみえてきたこと

不満のサインは0回、遊びに飽きたサインが3回、その行動自体が遊びの 때가1回であった。グループワーク中、他の参加者は、B君が不満があってもぶつかる行動を我慢できた時の担任の対応に注目をした。B君は他児からレゴブロックを取られそうになり叩こうとしたが、我慢できた。保育士はこの時「我慢できて偉い

ね」と褒めている。グループワークでは褒めることに加え、「これは、B君のだよね」と気持ちを代弁してあげることがさらに効果的ではなからうかと話題になった。また、保育士はB君がウロウロし始めたら遊びを提案し一緒に遊ぶようにしたり、そばで遊んだりした。すると友達にちょっかいを出すことなく楽しく遊べた。このように自制できたところを褒めて気持ちを代弁したり、遊びに飽きてウロウロし始めたところで新たな遊びを提案したりするために、保育士ができるだけB君のそばで遊ぶことが効果的であることが見えてきた。

② セッション3で決めたこと

おやつ後の遊びの時間帯、保育士はB君のぶつかる行動にうまく対応できそうだとしたこととなり、取り組みの時間帯を給食後に変更した。給食後、保育士は片付けや食べ終わっていない子どもの対応やトイレの援助、さらに午睡の準備で慌ただしく、クラス全体が落ち着かない状態となっていた。B君も他児と同様に落ち着かず、ぶつかる行動が多いとのことであった。そこで、給食後の遊びの時間帯においてクラス全体をいったん落ち着かせるための手助けや環境の構造化を次回までに探ってくることとなった。

【セッション4】

2週間の記録を基に給食後のB君の様子について話し合った。次に、給食後の遊び時間において、いったん子どもたちを落ち着かせるためにした手助けや環境の構造化とその効果を確認した。

① 記録から見えてきたこと

10回の記録からは、不満のサインは1回（保育士に）、遊びに飽きたサインが0回、その行動自体が遊びの時間が1回であった。B君は不満があり友達が嘔みそうになったが、保育士が「あ！」と声を出すと、嘔まなかったことが1回あった。保育士の手助けで自制できることが見えてきた。また、給食後、子どもたちが落ち着いて過ごせるようにごちそうさまの仕方や職員の役割分担を変更した。さらに給食後の遊び場所である畳スペースでは、一人で夢中になって遊べるようにブロックを出すようにした（表3）。結果、B君をはじめ、クラス全体が落ち着いて活動するようになり、B君のぶつかる行動は目立たなくなった。

② セッション4で決まったこと

この間の手助けや環境の構造化によって、取り組みが順調に進んでいることが確認されたため、同じ対応を継続することとなった。終わりに次回の事例発表会に向けての発表内容の確認

表3. 変更前後の様子（子どもの活動と役割分担）

変更前の様子	変更後の様子
①給食を食べ終わった子どもから畳スペースへ移動する。	①ほとんどの子どもが食べ終わったグループからグループ単位で畳スペースへ移動する。
②子どもは午睡準備まで各自で絵本を読みながら待つ（保育士Aが担当）。	②子どもは午睡準備まで各自で絵本を読んだりブロックで遊びながら待つ（保育士Aと保育士Bが担当）。
③子どもたちがほぼ給食を食べ終わった頃、保育士Aと保育士Cが午睡の準備をする。	③保育士Cが食べ終わっていない子どもの援助と片付けをする。

をした。

#### 【セッション5】

この回は事例報告会を実施した。前回のセッションで発表用のフォーマットを渡しており、それにそって保育士から報告があった。これを受け、スタッフが補足説明をした。

#### まとめ

保育士はB君の良い行動に注目し褒めたり、一緒に遊んだりする機会が今まで以上に増えた。保育園生活は子どもと保育者との信頼関係を基盤として成り立っており、保育士は幼児の意欲、心情、態度の育ちへ大きな影響を与える身近な存在である。B君は大好きな保育士との好ましい関わりが増え落ち着いて活動をするようになり、ぶつかる行動が減少したと考えられる。さらに保育士は自分たちが困った行動と捉えていたB君のぶつかる行動には意味があることに気づき、行動の意味にあわせた手助けや環境の構造化をしたことも、ぶつかる行動の減少に効果があったと考えられる。また、この実践では目標行動を具体化するために困った行動が発生しやすい時間帯を絞り込み観察・記録を始めた。筆者らの計画では、観察・記録からぶつかる行動の意味を見つけそこから目標行動を具体化する予定であった。しかし、決めた時間帯での困った行動はセッションごとに目立たなくなったため、目標行動を具体化せずに進めた実践であった。

## 2.ペアレントトレーニングを教育・保育現場に応用するための研修会実践事例

### (1) みんなと同じ行動をしてもらいたい3歳男児

C君はA市内にある保育園2歳児クラスに在

園中の男児である。当該園より園内研修会開催に応募があったため筆者らが園に出向き、保育士を対象にペアレントトレーニングの技法を応用したプログラムを実施した。クラスには24名の子どもが在籍しており4名の保育士で受け持っている。プログラムには担任の保育士4名、園長、主任保育士の計6名が参加した。

#### 【セッション1】

セッション開始前に筆者らが給食から午睡まで保育参観を行った。講義の後、保育参観の感想等を共有した上で、C君に関する情報共有と保育士が困っていることについて聞き取りを行い、目標行動と記録の取り方、今後試してみることについて決めた。

##### ① 保育参観から見えてきたこと

給食の場は、保育士が食事を取り分ける際やおかわりを装う際に出るガチャガチャという音や声かけ等、聴覚刺激で溢れていた。また活動の流れがスムーズに構成されておらず、手持無沙汰にしていたり、何をしたら良いのかわからない様子の子どもが目立った。C君はマイペースに過ごしていたが、給食の際に保育士が隣に座ると保育士の存在を意識しながら一生懸命ご飯を食べており、その様子から“褒めてもらいたい”という気持ちが感じられた。

##### ② 現在困っていること

次の活動に移る際の気持ちの切り替えが難しいことが挙げられた。特に、給食前に保育室に戻ってきた時、「トイレに行こう」の声かけで他児は行動するのに対し、C君は部屋の隅に行ったり物陰に隠れたりするという行動が見られ、保育士間でもどのように対応したら良いのか迷っているとのことだった。

##### ③ セッション1で決めたこと

②で挙げられたことを踏まえ、「給食前に遊



びをやめて保育室に戻ってくる」ことを目標行動とし、ABC行動分析の方法で観察・記録をすることを決定した。さらに、他児に無理に合わせようとせずにC君の意思の尊重を心がけることを共有した。また、給食前から午睡までの流れをスムーズにする目的として環境の構造化（グループ単位の行動、席の調整、聴覚刺激の整理）を行った。

#### 【セッション2】

講義の後、保育士の記録を基に検討を行った。その後、今後の取り組みについて決めた。

##### ① 記録から見えてきたこと

提出された観察記録より、保育士の声かけや手をつなぐなどの手助けがあると次の行動に移りやすいということが見えてきた。また、保育士の関わり方も、C君の気持ちに寄り添ったものに変化していた。保育士より、「観察・記録をする必要があったため、C君への注目が多くなり声かけのタイミングや褒めるポイントもつかめてきた」と報告された。

##### ② セッション2で決めたこと

記録をした場面においては環境の構造化と保育士の手助けによりC君の行動もスムーズになっていった。そのため現在の取り組みはこのまま継続していき、その他の場面で困っていることに取り組むこととなった。その中で保育室からの飛び出しが挙げられ、まずはどのような時に出ていきどのように戻ってくるのかを観察・記録することとなった。場面としては、観察しやすい朝の登園後に絞った。

#### 【セッション3】

講義の後、保育士の記録を基に検討を行った。その後、今後の取り組みについて決めた。

##### ① 記録から見えてきたこと

保育士がC君の特性（気持ちの切り替えに時

間がかかることや自分のペースがあること）を理解し、見守る姿勢を大切にしたら、飛び出しや機嫌が悪くなることはなかった。保育士らは、飛び出しはC君の「嫌だ」の表現だったのではないかと振り返った。

##### ② セッション3で決めたこと

気持ちの切り替えに時間がかかるため、次の活動に移る前に早めに予告をしておくようにした。現在の取り組みは継続しながら、次に体操の時間にうろうろしてしまうことが気になるので、体操の場面について記録してもらおうこととなった。

#### 【セッション4】

保育士の記録を基に検討を行った。その後、今後の取り組みについて決めた。

##### ① 記録から見えてきたこと

提出された観察記録から見えてきたことは、C君は“みんなのそばに来た”り、“まわりをうろうろ”しており、C君の中にも体操をしようという気持ちはあるように感じられた。ただ、C君の特徴として大人数での活動が難しく集団の中に安心して入ることの困難さがうかがえた。

##### ② セッション4で決めたこと

C君は集団の中に入るにはまだハードルが高すぎたため、スモールステップを心がけた目標設定や手助けを行っていくこととなった。具体的には、まずC君に参加したいかどうかを尋ねてみることにした。したくない場合には無理に集団の中に入れようとせずに、その場で保育士と見学をすることを強化していくこととなった。

#### 【セッション5】

保育士の記録を基に検討を行い、これまでの振り返りを行った。

① 記録から見えてきたこと

C君の気持ちを聴くことを意識した結果、嫌がらずにその場にいられるようになってきた。さらに、CDデッキの側に寄ってきたり、音楽に合わせて体を揺らしてみたりとC君なりの方法で参加するようになった。

② これまでの振り返りと今後に向けて

体操の場面では、“体操をすること”をいきなり求めようとせずに、C君が現在どの段階にいるのかを把握しその段階に応じた手助けを行っていくことが大切であるというように、保育士の捉え方の変化が見られた。記録を取ることで、C君が体操に全く興味がないというわけではなく、友達が何をしているのか関心を持っているということが大きな発見であった。今後もC君の主体性を大切にしながら、1つ1つのステップを共に喜びながら達成していくことを共有した。

まとめ

今回の実践では3つの目標行動に取り組んできた。従来の保育士への支援は会場に集まり講座に参加してもらうスタイルであったが、実際に保育園を訪問しC君や保育士の様子や保育の環境を見ることができたことでより現場の困り感に寄り添った細やかな支援が可能であったと考えられる。観察記録をとることで、C君の発するメッセージを理解し、C君の主体性を大切にすることを意識してきた。この取り組みにおいて重要であったのは、保育士のC君に対するまなざしの変化であると推察される。取り組み後の保育士の振り返りでは、「今まではみんなと一緒にしないといけないと保育士が思い、本人にも負担が大きかった。今では保育士が受け入れ本人も過ごしやすい環境になった。」「(保

育士の)気持ちにもゆとりができ本人のペースに合わせることができるようになった。」という感想が挙げられた。保育園という集団生活の場では保育の流れにC君を導くことも大切なことではあるが、C君の発達段階を踏まえ、今、目の前にいるC君に必要なことを考えることが有効に働いたと思われる実践であった。

(2) クラスからの飛び出しを減らしたいC君 4歳

(1)の実践で挙げたC君(3歳児クラス)であるが、進級や担任の異動で環境が変わり、飛び出しや怒ると物を投げたり押入れに閉じこもったりするという行動が見られるようになり、困り感を抱えた保育園より再度、園内研修開催の依頼があった。担任は昨年度のクラスから持ち上がり1名と新たに配置された担任1名であった。保育士らはペアレントトレーニングの研修は受けていたものの、保育士間で手助けの仕方などの一貫性が取れておらずC君との関係が崩れてしまったとのことだった。プログラムには担任2名、園長、時々補助としてクラスに入っている主任保育士の計4名が参加した。

【セッション1】

セッション開始前に筆者らが給食前の外遊びから午睡まで保育参観を行った。講義の後、保育参観の感想等を共有した上で、C君に関する情報共有と保育士が困っていることについて聞き取りを行い、目標行動と記録の取り方、今後試してみることに決めた。

① 保育参観から見えてきたこと

集団が混み合った状況や手持無沙汰な時に離席をしたり保育室から出ていこうとしたりする場面が何度か見られたが、その都度、保育士にお手伝いを頼まれると嬉しそうに行っていた。

また、保育士に褒められると非常に嬉しそうな反応を見せ、褒め言葉が強化子になっていることがうかがえた。

### ② 現在困っていること

思うようにいかない時や静止された時、手持ち無沙汰な時に保育室から飛び出してしまい手がかかるということが挙げられた。また、C君はそれぞれの保育士との関係性により反応が異なるため一貫した関わりが出来ていないとのことだった。

### ③ セッション1で決めたこと

②で挙げられた内容を踏まえ、「設定保育中に飛び出さずに活動に参加する」ことを目標行動とし、ABC行動分析の方法で観察・記録をすることを決定した。C君にとって離席や飛び出しは気持ちの安定を求めているがゆえの行動であることを共有し、無理に引きとめようとせず、その場にいられたことを強化していくこと心がけていただいた。

#### 【セッション2】

講義後、保育士の観察・記録を基に検討を行った。その後、今後の取り組みについて決めた。

#### ① 記録から見えてきたこと

C君の飛び出すタイミングが見えてきたことで、飛び出す前に保育士が関わるができるようになった。その結果、飛び出し回数も減ってきており、飛び出しても落ち着く時間をつくると戻って来ることが出来ていた。飛び出しやすい時間としては、混雑しやすい給食後の片づけの時間であるということがわかった。保育士自身も関わり方に迷っていたが、保育士に褒められるとC君が喜ぶということがわかり積極的に褒めるようになったと振り返っていた。

#### ② セッション2で決めたこと

C君の自制心を少しずつ育むために、少し我

慢をすると褒められるという経験を作っていくこととなった。具体的には、給食後の片づけの時間に飛び出しやすいため、飛び出す代わりの行動として「給食後飛び出さずに片づけをする」という目標行動で取り組むこととなった。そのための環境の構造化として、片づける際の列が1列だったものを2列にし、順番を待つ間の退屈な時間を減らすことを試してみるということとなった。また、飛び出しても、戻ってきた時に戻ってきたことを褒めることを心がけていただいた。

#### 【セッション3】

講義後、保育士の観察・記録を基に検討を行った。その後、今後の取り組みについて決めた。

#### ① 記録から見えてきたこと

片付けを嫌がることはあるものの保育士が傍についていると飛び出しはなかった。片づけの過程の一部分で出来る場面が見られたため、C君の“片付けよう”という気持ちが感じられた。ただC君にとっては、片付けの際に集団が込み合ってしまう場面や待たなければならない場面がどうしても苦手であることがわかった。また、保育士の関わり方の変化として、C君の発達のペースに合わせて難しいことを求め過ぎないよう心がけ、保育士全体でC君のことを見守る余裕が出来てきているとのことだった。

#### ② セッション3で決めたこと

現在の片づけのステップ（表4左）は、C君にとってはステップが多く、かつ並んで待たなければならない状況が見られた。そのため、片づけの際にグループ分けを行い待ち時間を短くすることと、C君の片づけのステップの調整を行うこととなった（表4右）。さらにステップごとに褒めることでC君のモチベーションを保つことを心がけていただいた。

表4. 給食後の片付けのステップ

他児の行動	C君の行動
①ランチマットの桶を取りに行く	①ランチマットの桶を取りに行く
②食器を片づける	②お弁当箱のふたを閉める
③お弁当のふたを閉める	③おはしをケースに戻す
④おはしをケースに戻す	④②③を袋に入れる（袋は保育士が持ってくる）
⑤お弁当袋を取りに行く	⑤④の袋をかばんに入れる
⑥③と④を袋に入れる	⑥食器を片づける
⑦⑥の袋を片付ける	⑦ランチマットを桶に入れる
⑧椅子を片付ける	⑧椅子を片付ける
⑨ランチマットを桶に入れる	⑨スモックを脱ぐ
⑩スモックを脱ぐ	⑩スモックをかばんに入れる
⑪スモックをかばんに入れる	

## 【セッション4】

園内研修会として、全3回の取り組みについて振り返り、報告会を行った。

## まとめ

C君の特性として集中力が保たれにくいことや落ち着く時間が必要であることを共有したこと、C君の立場から環境の構造化や手助けの方法を検討していくことが重要であった実践である。昨年度より引き続き検討することとなったが、昨年度安心してクラスで過ごせるようになってきたところで新年度になり再び新たな環境で適応していく必要性が出てきた。その新たな環境の中でC君に見られた“飛び出す”という行動が、居心地の悪さを意味するメッセージであったということに保育士が気づき、C君に寄り添いながら関わってきたことで少しずつ飛び出しの回数も少なくなっていった。子どもたちにとって過ごしやすい、居場所となる環境作りの重要性を再確認することができた実践であった。

## IV 今後の課題

今回報告した実践では観察・記録の記述内容で、子どもが望ましい行動をしていたにも関わらず、その後、発生した困った行動に注目し、望ましい行動を見逃してしまう傾向がいくつか見られた。この事例では保育士が子どもの望ましい行動に注目したり褒めたりすることが定着しづらい傾向にあった。望ましい行動に注目する観察・記録の方法を獲得するためのプログラムの検討の必要性が見えてきた。また、2年に渡り取り組んだ実践では、1年目と2年目では目標行動は異なっていたものの、子どもの特性や発信するメッセージを理解することと主体性の尊重が共通のテーマであった。1年目で研修を受けたにも関わらずこれらのテーマが定着しなかったのは、その場面における困り感への対応に追われてしまったことなどが考えられるため、全体的な保育の視点に汎用できるよう、プログラムを検討していく必要がある。最後に、4実践に共通して見えてきた課題は、保育者が抱える困り感への対応に重点を置いたため実践

中の困り感は解決したものの、その後の日々の保育にどのように応用できているのか、またはできていないのかの検証の必要性である。

### [謝辞]

本報告書の作成にあたり、お子様を対象とした実践で得られた成果の発表に快く承諾して下さった保護者の皆さまに深謝いたします。また、貴重な観察記録等の利用を快諾して下さった保育士の皆さま、筆者らと保護者、保育士のミーティングの調整をして下さった園長先生方に心より感謝いたします。さらに、子どもたちが心身ともに健やかに育つようにとの願いから、講座や研修会を企画、実施して下さったA市役所こども育成課の皆さまにお礼を申し上げます。最後に、今回の事例で出会った子どもたち、どうもありがとうございます。

### 注

- 1) その行動が発生するには何らかのきっかけによって生じ、その行動に対して周囲がどのように対応するかによって、その行動が減ることもあれば増えることもあるという考え方に基づいた記録方法。A : Antecedent (きっかけ)⇒B : Behavior (行動)⇒C : Consequence (結果) の流れを意識して記録をとる。
- 2) A君のクラスでは、「お話しじゅうたん」を敷きそこに園児が座って保育士のお話を聞いていた。しかし、絵本の読み聞かせは畳スペースで実施していたため「お話しじゅうたん」を用いていなかった。

### 文献

中村恵美子・福田恭介 (2013) 「ペアレントトレーニングを保育・教育現場へ応用するためのボトムアップに

よる個別型・チーム型支援プログラム」『福岡県立大学人間社会学部紀要』 vol23, No.1, 41-53.

福田恭介・吉岡和子・中山政弘・中藤広美・興津真理子・本多潤子・森万貴子・村上ゆき・小嶋秀幹 (2011) 『ペアレントトレーニング実践ガイドブック』あいり出版  
吉岡和子・福田恭介・中藤広美 (2010) 「保育・教育現場における特別支援へのペアレントトレーニングの応用」『福岡県立大学心理臨床研究：福岡県立大学心理教育相談室紀要』 2, 57-69.

第10回ペアレントトレーニングを応用した特別支援教育スキルアップ・プログラム募集要項 (2016), 平成28年度福岡県立大学附属研究所生涯福祉研究センター 教育研修事業部門

ペアレントトレーニングのスキルアップ講座 (201X), 平成X年度A市要保護児童対策地域協議会研修会募集資料

ペアレントトレーニングを教育・保育現場に応用するための研修会の募集について (201Y), A市要保護児童対策地域協議会資料